

山と博物館

第39巻 第8号 1994年8月25日

大町山岳博物館

べんのう滝

田中 欣一



白馬村の佐野坂下に源流を持つ姫川は、北アルプスからの本流を縦ぐいくつかの支流を併せて、日本海に注ぐ。その支流の一つに平川がある。五竜岳と大黒岳に端を発するもので、深いV字谷をなして、白馬村のグリーンスポーツの社の南で、姫川に合流している。砂防堰堤が施工されなかった時代は、御多分にもれず暴れ川で、人を寄せつけない、いわば未踏の処女地であった。今日では砂防道路がつけられたために、相当奥まで行かれるが、昔はわずかな人たちが、それも危険を冒して、アザミやウドブキなどの青物（山菜）採りに入山した程度で、人界から隔絶されたところであったと言っている。

その平川入りの大のけ沢・大沢・泥沢・ガラガラ沢・名無沢など数ある沢の中に「べんのう」というのがあり、そこに「べんのう滝」がある。名瀑の名にふさわしいという、その滝のあることは、一部のの人たちに口伝えに知られてはいたが、正確な位置、規模等は不明

で、写真公開なども全くなかったのであった。国土地理院の地図にも載っていない。

べんのう滝は現在は砂防道路のお陰で、平川をはさんで遙か彼方に望むことはできるが、それも滝の頭の部分だけで、その全貌が明らかにならなかった。

べんのう滝に行くには、湧水期をねらって、砂防道路から平川に降り、雪解けの冷水につかって平川を横切り、流水や累々たる岩石の沢を上るのが、最短距離の由である。水量の多いときは、無難危険の上もない。

べんのう滝の名の「べんのう」は、地元の言葉でここでは「巨き一枚岩」の意である。高さは二十メートルは越えよう。写真は今年のような湧水時でも、この水量があることからすれば、雨量の多いときは、さぞかし見事な瀑布の観を呈することであろう。

（白馬小谷研究「主宰」）

べんのう滝（湧水時 平成6.8.1 白馬村平川入）撮影 田中元二

チベット高原・

ニンチェンタグラ山脈東部の自然と動物

泉山茂之



右) 十日から五月七日まで長野県山岳協会のチベット東部地区登山偵察隊員として、ニンチェンタグラ山脈東部を訪れることができた。一般にチベットという樹木が一本もない広い荒原のイメージがあるが、チベットでも東南に向かうにしたがい湿潤となり、森林が出現し茶の産地となっている地域もある。私たちが訪れた

チベットは、ヤクを放牧場へ連れて行く子供達の歌声が谷間にこだまする。もう五月だというのに、気温は氷点下を記録した。ターツェの眼下を西へ流れ下るチュン・チュン河は、やがてヤルツァンボ河に会い、さらにガンジス河と出合つてインド洋に注ぐことになる。

チベットの首都、ラサから三八一キロメートル北東のナーチュで一泊、チベット高原上の広大な平原から西へ向かうと、次第に谷はえぐれて山は鋭くなり、ターツェのあたりでは険しく深い渓谷となる。ナーチュから二四四キロメートルの悪路であった。ターツェの集落からは、真っ青な空をバックにめざす六四四七メートルのチャチャチヨのピークが雪煙をあげているのが見えた。

地域は、ピヤクシンと思われる針葉樹が出現し、ようやく森林らしくなりはじめる地域であり、ちょうど荒原と森林帯との境界にあたっている。今回は、この地域の自然について報告したい。

私たちが、偵察基地としたのはターツェという集落である。ターツェには一〇軒、一〇〇名が住んでおり、全員がチベット族である。ほとんどの人々がチュンバと云うチベット服を着ているが、洋服を重ね着している人もいた。女性は原色のカラフルな民族衣装をいつも着ており、男性はカンバ(東チベットのチベット族)同様の赤い髪飾りをつけていた。あなたがたはカンバですかと尋ねると、ドゥーバだという答えが返ってきた。ターツェの標高は四一九〇メートル、主食となつてい

るチンコー麦の栽培はできず、ヤク・ヒツジの放牧が生活の基盤となつている。チベットでは耕作限界がちょうど四〇〇〇メートルあたりである。ヤクは、人々にとつて最も重要な家畜であり財産である。ヤクは一頭いくらするのかと尋ねると、ヤクは決して売らないということだった。一戸あたりのヤクの飼養頭数は四〇頭から一〇〇頭ということである。

ヤクは、ウシと同じBovus属であるが、モトはなかず、ブーブと呟くだけである。メスは搾乳を行うため仔牛とともに集落近くで飼い、オスは去勢して遠く離れた山中に放牧する。放牧は、雪線の四七〇〇メートル付近まで行われている所もあった。チベット西北部のチャンタン高原には野生のヤクが棲息するが、ターツェの周辺には棲息しない。野生のヤクのオスは最大一トンにもなり、気が荒く人々から恐れられている。しかし、家畜のヤクは小型でおとなしい。ヤクが厳しい環境に生育する硬い草でも生きてゆけるのは人々にとつて利点である。しかし、穀物を食べず、食草がなくなった時に長距離の移動をしなくてはならぬ。人々はヤクの放牧に大変気を使っていた。過度の放牧は、放牧地の植生に重大な影響を及ぼすことになり、厳しい環境条件下では、利用可能な自然草地の復元にはきわめて長い時間を要することを充分に認識しているのである。このため、遠い所に放牧しているヤクの管理には大変な労力を要することに。ターツェから一日で往復できない場合は、見張り小屋などに泊まることもある。ターツェよりも生活環境がさらに厳しい、チャンタン高原では、人々は定住せず遊牧が行われている。

このような、広範囲のヤクの放牧は植生に



ヤクの放牧

きわめて強い影響を与えている。ヤクはピヤクシンを食べることはないが、地上に目をやるとヤクの食べない草本だけが残されているという感じであった。ヤクは、平べったい口で小さな草木を器用にむしって食べていた。サクラソウの仲間、ハルリンドウの仲間がそれぞれ二種づつ咲いていたが、これらの草本はヤクが食べないので残っているであろう。ターツェ周辺では、タツエゴンバ(寺)の敷地から絶壁に至るまでが放牧地となっている。絶壁の、ヤクが行けない所ではヤギが放牧されていた。このような徹底した放牧は、野生動物にも深く影響していた。

チベットの奥地のターツェでも、一部の子供達を除いて北京語が通じた。四川省出身の通訳の北京語は通じなかったが、私の簡単な北京語がちょうどよかったようだ。チベット

の中国支配は三五年に及ぶが、文化大革命の抑圧の時代を経て、彼らも時代変動に翻弄され続けた。厳しい環境条件に生きるチベット人にとって、仏教とは心のよりどころであるが、文化大革命の時代にはターツェの寺も破壊された。今なお痛々しい姿をとどめる破壊跡や、寺から持ち出されたマニ石（経文を彫刻した石）は、家の石垣や、放牧地の境界の石積として残され、当時の状況が想像された。破壊前には七〇名いたという僧侶は、復元された今は一〇名いる。私が仲良くなったのは、修行僧のプツェリン氏である。私は、彼から多くのことを教わった。タツェゴンパの高僧はコンジョージンゼ師で、チベット仏教の黄帽派、いわゆる新教に属する。私はプブの案内で師の自宅を訪ねた。師は経文を唱えながらチンコー麦をひいていた。正装の姿も写真に収めさせてくれた。人々は僧たちのことを心から尊敬していた。チベット人にとって、仏教は心の支えになっていて、自身の手足同様に重要なものであることを実感する。プブを介して、色々な人から話を聞くこと



サクラソウの仲間

ができた。動物についても、聞き取りを試みた。サルは、ターツェにはいないが茶色の毛をした集団がもつと下流の方にいるということであった。ユキヒヨウは、かつてはいたが今はもういないとのこと。クマは、ターツェにも時々やってくるということであった。クマといっても、ツキノワグマかヒグマかどちらなのか問題である。身体の色は、黒ともいうし茶色ともいう。身体

の大きさはあまり大きくない。喉の模様はと聞くと、白っぽい模様があるとのこと。どうやらツキノワグマの可能性が強いが、断定はできなかった。チャタン高原にはヒグマが棲息するが、チベット南部ではツキノワグマを産する。「ヒマラヤアカグマ」と云う、黒くないツキノワグマがいるという報告がある。

寺の敷地内はヤクの放牧地ともなっているが、プブはまた私をヒマラヤマーモットのいる所へ案内してくれた。斜面の上部はビヤクシンの林、下部は放牧地となっている草地でヒマラヤマーモットは集団生活をしており、最大一六頭を確認した。近づく穴に逃げ、距離を置くと穴から出て採食したりじゃれあっていた。ヒマラヤマーモットのことをターツェではチヨールワあるいはチンビと呼び、捕獲の対象とはならず、むしろかわいがっていた。ここは、ヤクの放牧地になっているが、ヤクが近づかない限り自由に活動していた。

チャタン高原でも、ナーチュからのターツェへの途中でも、車に驚き走り去るナキウサギはたくさん見かけた。このナキウサギは、

「草原すまい」のクチグロナキウサギであった。ターツェ周辺の放牧場の緑のブッシュや岩の斜面には、クチグロナキウサギではない、「岩すまい」のナキウサギが棲んでいた。臆病者で、見える時はいつも後ろ姿ばかりだった。短い滞在だったこともあるし、私の双眼鏡はほとんどターツェの人々が占有していたこともあって、種の確認まではできなかった。

私たちは、四月二八日からチャチャチヨの偵察のため、北東面のチャチャ・チュの源流部へ向かった。一六時三〇分、ターツェをトラックの荷台に乗り出発。チュン・チュ本流の渓谷は、下るに従って険悪さを増す。今は廃墟の旧チャヤリを通る。かつて、この地域の中心だったチャヤリは険しい渓谷で土地が狭く、背後の崩落地が危険なために上流のアツアに移転した。下るに従って次第に落葉広葉樹の小高木が増し、タマドゥと呼ばれるシヤクナゲが増えてくる。シヤクナゲは一種のヤマナギが増えている。シヤクナゲは一種のみ。ターツェの下流一五キロメートルのケンマロでガイドのミンジャヤさんが乗り込む。ミンジャヤさんは三〇才、一才の男児がいる。ヤクは五〇頭持っている。すさまじいトラックの揺れにどうにか耐え、一七時三五分に標高三九五メートルのチャチャ・ドに着く。

ターツェから二五キロメートル。こここの風景は、斜面の緩斜面に落葉広葉樹林、岩場や北斜面にビヤクシンで日本の景観にどことなく似ていて、チベットにいてという感じはしなかった。この日はチャチャ・ド泊。「ド」とはチャチャ・チュと本流のシユタル・チュが会うとの意味。本流には木の橋が架かり右岸に渡ってテントを二張り張る。周囲は、ちょっとしたヤナギの林になっている。枯木がいっぱいあって、夜はがんだん焚火をした。チ



ジャコウジカの足跡

ベットらしくない。

翌四月二九日、晴れ。七時の気温マイナス四・五度、八時出発。チャチャ・チュの谷は上流に向かって二四〇度、山道はしっかりしていて迷うような所はない。やがて、大きな崩落地に出会う。ミンジャヤさんは「カリール」、ゆっくりゆっくりとの意味である。崩落地を横断。登るに従ってヤナギの仲間が少なくなり、ナナカマドの仲間が目につくようになる。傾斜がゆるやかになってきて、低木が散在する草原状になり、チャチャチヨ、チャクチヨからモナムチヨまでの山群の展望が開ける。四月中旬の降雪がところどころに残る。チャチャ・チュ右岸の長大な山脈、大きなピークは、左のコルはドボ・ラ、ミンジャヤさんは雪のない時期にヤクを連れて峠を越えるという。いったい、あの急な山のどこを

越えるのだろうか。一〇時一六分、四五六〇メートル、ミンジャさんの下の見張り小屋を過ぎる。ビヤクシン主体の小高木のトラバース、相変わらずしつかりしたトレース。雪の上に、ジャコウジカの真新しい足跡が三本あった。

一九四六年、この地域を訪れた木村肥佐生は、「チベット潜行十年」の中で、次のように述べている。……この地方ではジャコウがとれる。ジャコウ鹿のことをチベット人たちはラとよぶ。鹿というよりはむしろヤギに似ている。ジャコウ袋はつまり雄の睾丸で、その強力な臭いで雌を誘引する。だから冬の交尾期にその中身が一番充実する。中身のジャコウは黒砂糖のようなもので、クレオソートに似た臭いがする……。ジャコウ袋は、生殖器とへその間にあつて生殖器ではない。最高級の香水の原料となるために乱獲された。ジャコウジカは原始的なシカの仲間とされ、角はなく、オスにのみ上顎の犬歯が発達した牙が二本ある。採食痕などのフィールドサインからも、ミンジャさんがよく出会うということからも、チャチャ・チュ周辺での個体数は少なくないと思われた。ジャコウジカは森林に棲み、おもに草本を採食していた。

一度カール底に降りて、再び登る。モレーン上のミンジャさんの見張り小屋、四四八〇メートル、ここより上は雪上を進む。南西斜面は地面が出ているが、北東斜面は雪に覆われている。この上はカール底で平坦、一面の水原になっている。標高は四四六〇メートル。水原の先のどんずまりには、ミンジャさんの一番上の見張り小屋の旗が見え、その左奥には氷河の舌端が見える。氷河はチャチャ・ヨ・チャクシヨの裏側からと、意外に深いと



ターツェの子供達

思われるモナムチヨの左から流下し、さまざまなアイスフォールになっている。ベニバシガラスが二羽で飛びまわり、戯れている。カール雪の間から覗かせている水の流れにアツクシガモのつがいがいる。上空をヒゲワシが通過。オオカミの足跡を横切る。オオカミはチャングと云う。他の野生動物は捕獲禁止で保護されているが、オオカミだけは家畜を襲うということで、捕獲が許されている。ミンジャさんは、雪がなくなるとヤクをここまでつれてくるが、見張りを欠かさず、オオカミが来ると銃で撃つということであった。しかし、オオカミの二本のトレースはいずれも一頭づつで、オオカミもヤクの成獣を襲うことはあまりないということであった。ミンジャさんは、急峻な岩の斜面を指した後、両手で角の形を示し、野生のヤギがいると教え

てくれた。ブルーシープのことだろう。足跡などのフィールドサインを見ることができず確認できないことが残念である。カール底はチャチャ・ツオという湖になっている。深い氷河湖と言うよりは、湿地状と思われた。ミンジャさんの見張り小屋は、真近に見えるが、そこまで行かずに一二時三五分、四五四〇メートルで引き返すことにした。

引き返した地点にはクチジロジカの足跡があつた。足跡は、ニホンジカよりはるかに大型で、ヤクとは形が違う。ミンジャさんに聞くとシカだと言う。私が口を手をあて、ここが白いかと聞くと、そうだとのこと。足跡は、雪原の中から顔を出した、水辺のイネ科草本のまわりに残されていて、クチジロジカの水草が水辺の草本であることが伺えた。クチジロジカは、東チベットだけに産し、オスの成獣は二〇〇キログラムにもなり、ニホンジカよりはるかに大型のシカである。放牧の拡大と、漢方薬となる袋角のために捕獲され個体数が減少したとされる。クチジロジカの生態についてはほとんどわかってない。このチャチャ・チュでも、ヤクの放牧はクチジロジカにも深くかかわっていると考えられた。ヤクは雪に弱く、降雪を見ると下ろされる。現在残っている雪は、四月一〇日から一五日ころにかけての、季節はずれの大雪である。クチジロジカも雪に追われて、高度を下げたに違いない。クチジロジカのフィールドサインを見つけたのは、後にも先にもここだけで、ヤクの放牧が行われている上、限なくのみクチジロジカが棲息していると思われた。わずかの恵みをめぐっての、家畜と野生動物との共存は困難なのであろう。

カールの斜面には、ヘルツとよばれるツツ

ジの仲間の矮生低木が目立つ。その間の枯草の上には、サクランボが可憐な花を咲かせていた。イネ科草本の多い乾燥した草地では、チヨウを見た。チヨウはヒメチャマダラセリで、活発に活動していた。雪線高度は四七〇〇から四八〇〇メートルである。写真を撮りながら、登ってきたルートを下山。一六時三十分、チャチャ・ド着。帰りも、トラツクの荷台は相変わらず激しく揺れる。一九時三十分、ターツェ着。

私たちは、この後三日間ターツェに滞在した後ラサに帰った。私にとって、ターツェの印象はとて鮮烈だった。きびしい生活環境の中でもしっかりと自然に対峙して生きる人々、無理のない無駄のない生活。ラサの街の雑踏の中でも、私はターツェのことを幾度となく想い、そして噛みしめていた。

出発の朝、少年ジルジョンは、ヤクたちを放牧場に連れて行った。谷いっばいに歌声を響かせながら。

(野生動物保護管理事務所)

博物館だより

企画展 日本板画院長野支部展

九月十一日(日)～十八日(日)

於 教室・講堂 本展のみの入場無料
支部員の版画力作約六十五点を展示。

山と博物館 第39巻 第8号

発行所 千歳長野県大町市 TEL 〇二一
印刷所 長野県大町市 大町山岳博物館
印刷部 大糸タイムス印刷部
定価 年額 一、五〇〇円(送料共(切手不可))
郵便振替口座番号 〇五四〇一七三三三三